

博士学位論文審査要旨

2009年1月28日

論文題目： 近江商人 正野玄三家の研究

学位申請者： 本村 希代

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 末永 國紀

副査： 経済学研究科 教授 西村 卓

副査： 名古屋大学大学院経済学研究科 教授 中西 聡

要 旨：

本論文の問題意識は、商家経営の展開を近世・近代を通じて一貫して考察することによって、地域に根ざした商人資本が自己変革を遂げながら近代社会へいかに適応し、いかなる役割を果たしたのかを明らかにすることにある。分析対象は、近江国蒲生郡日野（現、滋賀県蒲生郡日野町）に本拠を構え、貞享元年（1684）の持下り行商開始を創業年とする近江商人正野玄三家（現、日野薬品工業株式会社）である。利用されている史料はすべて、同家に残された古文書による一次史料が中心である。

本論文は、序章と終章を含む六章から構成されている。序章では、従来の商人資本研究を批判的に検討し、その上で本論文による研究の特徴が、300年近い長いスパンで個別の商家経営を取り上げていることと、地域社会のなかでの正野家の地域名望家的活動を考察している点にあることを強調している。

第一章「創業期の軌跡」では、近江商人としてスタートした初代正野玄三が、母親の病気を契機に一転して医薬修行に入り、やがて日野の地場産業に成長する製薬業を自らの家業として育てていく過程を、同家の家訓や資産蓄積状況とともに検証している。

第二章「近世後期における売薬流通」では、まず家伝薬「万病感応丸」をはじめとする売薬の製造工程は、原則として守秘事項であったとし、販売については、近江商人の全国に展開する出店での店頭販売に依存して、全国的な販売網を築いたことを明らかにしている。多くの近江商人が正野家の売薬を受け入れた背景には、薬効とともに、日野売薬の濫觴の家としての社会的評価の高さにあったと主張している。

第三章「明治期における企業家活動」では、正野家の有価証券投資や企業経

営参画を、地域との関わりにおいて明らかにしたものである。すなわち有価証券投資は、家業永続のための安定した資産運用手段であったと捉えている。また、企業経営参画は二方向の異なる態様を示すことになったことを指摘している。大阪と今治を中心に展開した伊予紡績については、事業失敗後は撤退へと向かう合理的判断を下すことができたが、日野地域に密着した近江鉄道の建設においては、社長を引き受けるなどの終始リスクを背負うことによって、地域の名望家としての役割を果たしたと評価している。

第四章「近代における近江日野売薬の展開」では、西洋医学の普及のなかで、在来的な売薬産地が迎えた危機への対応を、正野家の行った社会的活動を通して論じ、製薬業としての同家の存在と日野町域の近代における軌跡が相互依存の関係にあったと論じている。

終章においては、論文全体のまとめとして、正野玄三家の製薬業経営が日野地域を離れて存続せず、また日野地域の売薬業も正野家を無くして存在しなかったことを論じている。

本論文は、一次史料を駆使した個別実証分析であり、とくに経営史的側面から正野家の活動を名望家的活動として位置づけている点は、従来の近江商人研究になかった新しい視点といえる。しかしながら、名望家論は、政治史・社会史など多面的な分野からのアプローチがなされている分野であり、史料的にも一層具体的な事例の発掘によって正野家の名望家活動の実態が解明される必要がある。そうした課題は、他の近江商人の商家の分析を含む著者自身の今後の研鑽によって果たされると考えられるのであり、著者は十分にその期待に応える力を有しているといえる。

よって、本論文は、博士（経済学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2009年1月28日

論文題目： 近江商人 正野玄三家の研究

学位申請者： 本村 希代

審査委員：

主 査： 経済学研究科 教授 末永 國紀

副 査： 経済学研究科 教授 西村 卓

副 査： 名古屋大学大学院経済学研究科 教授 中西 聡

要 旨：

本論文提出者は、2009年1月27日午後1時から1時間以上にわたって行なわれた試問会において、提出された論文に関する研究の背景や意義、その学術的貢献について説得力のある説明を行い、また審査委員との質疑・討論を通じて当該分野に関する高い学識と幅広い研究能力を有していることを証明した。

また、古文書解読能力とともに、英語についても十分な学力を有していることが認められた。

よって、総合試験の結果は、合格であると審査委員一同が判定した。

博士學位論文要旨

論文題目： 近江商人正野玄三家の研究
氏名： 本村 希代

要 旨：

本研究の目的は、商家経営の展開を近世・近代を通じて考察することで、地域に根ざした商人資本が日本の近代化や資本主義化へ、どのような役割を果たしたかを明らかにすることである。分析対象は、近江国蒲生郡日野（現、滋賀県蒲生郡日野町）に本拠を構え、貞享元年（一六八四）の持下り行商開始を創業とする近江商人正野玄三家（現、日野薬品工業株式会社）である。

近江商人とは、持下り行商に始まり、本家を近江におきながら他国稼ぎを展開する商人のことである。このような近江商人については、従来、近世期の活動を中心にその特殊性が強調されてきた。しかし次第に近代も含めた経営分析が進むようになり、その分析を通じて日本の近代化・資本主義化過程を考察するなど、近江商人研究は商人資本研究の一環として捉えられるようになった。

また近世・近代を通じた商人資本分析については、財閥や総合商社に成長するような商人資本を扱った研究がよく知られる。さらに近年では、大都市だけでなく地方や地域の近代化・資本主義化へ焦点をあてた地方資産家層の対応分析が行われるようになった。その特徴としては、地方資産家の諸活動に含まれる名望家的要素に、注目が集まっていることを指摘できる。ただし経済史研究においては、地方資産家による名望家的活動の一側面をとりあげるにとどまっている。商人資本の分析視角は多様化していったが、商人資本を地域社会や地域経済との関係から問う上では、まだ検討の余地があるように思われる。

以上の点をふまえると、本研究の特色は次の通りとなる。

第一に、近世・近代を通じ三百年近い非常に長いスパンでその商家経営を取り上げる。個別商家の経営史料による近世・近代を通じた商人資本分析に関しては、財閥研究などを除くと、本格的な研究は少ない。しかし先行研究において分析がなされた商家は、近世後期を創業としており、近世期についてはその対象とする期間が短い。商人資本の近代化過程究明が目的である以上、近世期に関しては幕末（維新时期含む）という変革期の分析に重きが置かれることになる。それゆえ幕末以前を創業とする商家であれば、当該期を分析する上で何ら問題はない。しかしそれをもって近世期の商人資本のあり方が解明されたわけではない。同じ幕藩体制下であっても、その時期により社会構造は異なっており、近世期を一様に論じられるものではないだろう。むしろ近世初期からの分析が可能というわけではないが、本研究では正野家を分析対象とすることで、一七世紀後半から商人資本を追うことができる。そして近世期以来の商人資本が近代以降、どのような変化をとげるのか考える。

第二に、地域経済の展開と名望家の存在意義について考察する。企業勃興期に設立された企業の多くが、商人資本によって支えられていたことは、すでに先行研究でも明らかになっているが、正野家の有価証券投資の実態と、企業経営への参画状況を明らかにすることで、地域における近代産業の定着と存続、および正野家の名望家としての役割について考える。また正野家の名望家的活動が自身の経済・経営活動とどのような関係にあったのかについてもあわせて検証する。

なお正野玄三家についての研究は、これまでに初代正野玄三や、正野家の雇用形態など、断片的な分析は存在したが、家業である製薬業経営そのものについてはほとんど言及されてこなかった。そこで本研究では、正野家の創業からの経緯を追いながら、製薬業経営も含め全体的な実証分析を行うこととする。

そして本研究の構成と概要を以下に述べる。

第一章「創業期の軌跡」では、近江商人としてスタートした初代正野玄三が、行商から一転して医薬修業に入り、その後、家業（製薬業）意識を構築していく過程を、同家の創業期の資本蓄積と共に検証した。創業期における近江商人は、支援者に支えられつつも、立身への強い意志を持ち、自身の才覚をはたらかせることで、持下り行商をその後の開店や独立への蓄積基盤へ結びつけていくことになる。初代正野玄三もそのような近江商人の一人であった。行商期を助走期間とし、その後、在地である日野で開始した製薬業経営によって飛躍的に経営規模を拡大していく。また初代玄三の場合、自らを法橋であると律することが、家業（製薬業経営）への邁進につながっていった。そしてこの正野家を濫觴として、日野売薬が地域の産業として定着していくことになる。

第二章「近世後期における売薬流通」では、正野家の売薬製造および販売の過程を、同家を取りまくネットワークとの関係からとりあげた。正野家では売薬の原料となる薬種の仕入れを、大坂道修町の薬種中買仲間に属していた近江屋（中上）太右衛門に多くを依存していた。薬種中買仲間は享保期以降、薬種流通の中核を担った組織であり、正野家と中上家の間には姻戚関係も結ばれていた。なお売薬の製造工程、特に家伝薬である「万病感応丸」については、売薬製造にかかる薬種の配合や製法を原則極秘とし、その作業は正野家の上層者のみで行っていた。一方、販売に関しては、配置薬方式ではなく、近江商人の各地出店を取次とする店頭販売方式であった。他国稼ぎを展開する近江商人の商業取引ネットワークを利用し、全国的な売薬販売網を築いた。なお各近江商人が、正野家の売薬販売を自家の多業種経営の一環として受け入れた理由は、正野家の社会的評価の高さにあった。日野売薬の濫觴として、正野家は地域の中で独自の地位を有していた。また正野家は商業上の結びつきだけでなく、姻戚関係を広く近江商人間でも構築しており、これも正野家と多くの近江商人との関係を深くする要因であったといえる。

第三章「明治期における企業家活動」では、明治期に見られる正野家の有価証券投資や企業経営参画を、同家の家業意識や地域とのかかわりにおいて明らかにした。正野家の場合、有価証券投資は家業永続のための安定した資産運用手段としてとらえており、それ自体を積極的に行っていたわけではない。一方、企業経営参画については、家業や地域とのかかわりにより、対象的な取り組み方をすることになる。大阪・今治を中心に展開していた伊予紡績については、家業（製薬業）への悪影響を懸念し、事業失敗後は撤退へという合理的決断を下している。しかし近江鉄道については、地域に密着した事業であるがゆえ、鉄道敷設地域の代表者として、その経営に関与し続けることが求められ、終始そのリスクを負うことになった。なお近江鉄道における八代玄三の経営参画は、資金提供者や経営者としての能力を見込んだものではなかった。鉄道という近代産業を新たに地域へ定着・存続させるには、地域の意向をとりまとめ、牽引していくようなリーダー的存在が必要となる。近江鉄道経営では「正野玄三」が持つ地域における信用力が不可欠であったといえる。正野家は、日野を拠点に製薬業を営み、それを通じて多くの近江商人との関係を築き、また日野売薬の濫觴として地域内での名声を有していたことが関係していよう。そして八代玄三は、近江鉄道経営を自身の社会的活動の一環として受け入れることで、地域における名望家としての役割を担った。

第四章「近代における近江日野売薬の展開」では、明治期以降、西洋医学が普及していく中で、従来の売薬産業がむかえた危機に、産地はどのような対応をしたのか、正野家の社会的活動を中心に分析した。新たな売薬行政が展開される中で、日野地域では近江日野売薬業組合が組織され、さらには地域の枠組みを超えた滋賀県売薬業組合联合会も日野売薬を中心に結成されることになる。この聯合会の会長となり、各売薬産地間の連携強化に尽力したのが、八代玄三であった。また八代玄三は、経営難が見込まれる小規模売薬業者を救済するため、江州日野製剤株式会社を設立し、同社の社長となる。このような八代玄三の行動からは、地域の公益を追求する名望家としての姿勢がうかがえる。そして地域の側もそのような八代玄三に期待を寄せており、正野家は

地域の要望に応えることで、その存在意義を高めていった。しかし名望家としての活動は、必ずしも自家の製薬業経営に有益になるものばかりではなかった。そこで八代玄三にかわり、正野家の店務改革に取り組んだのが後の九代玄三であった。九代玄三が意識したものは、家業および家の永続であった。正野家の製薬業経営が維持されることで、同家の信用は保たれた。なおこのようにして生み出される信用は、正野家を名望家として成り立たせる要因にもつながっており、正野家の経営は日野地域と相互依存の関係にあったといえる。

以上のことから、本研究を通じて正野家は、近江商人の経営特質をいかした経済活動を、日野地域を中心に展開することで、自家の信用を地域内において高めていたことが明らかになった。また日野地域の近代化は、そのような正野家の信用力をもって展開される名望家活動により支えられており、ここに地域における商人資本の役割を見いだすことができる。つまり地域社会・地域経済の近代化・資本主義化の過程においては、経済力だけでなく、地域に根ざした信用力が重要であったといえる。